JSPS London

巻頭特集　今JSPS Londonがオモシロイ！

「現代社会における"育人"」

松本紘京都大学総長インタビュー

2分でわかる！英国高等教育改革のいま

JSPS London INTERVIEW The 絆

元国際協力員・山口氏に聞く

JSPS London

NEWSLETTER

No.31

日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター　2011年10～12月 ニュースレター

センター長の視点 2
巻頭特集　今JSPS London がオモシロイ！ 3
英国内8大学にてJSPS事業説明会開催 7
科学とアートを融合させた企画展 "Air Pressure" 開催中 8
平松幸三のご存じですか？ 9
「イケてる」スペシャリストを養成
"University of the Highlands and Islands" A to Z 10
Pre-Departure Seminar and Alumni Evening 11
日本留学フェア "Experience Japan Exhibition" 開催 12
JSPS London INTERVIEW　The 絆 13
第8回日英科学技術協力合同委員会 14
ぽりーさんの英国玉手箱 14
英国学術調査報告 2分でわかる英国高等教育改革のいま 15
スタッフ写真館　今月の1枚 18
JSPS Programme Information 19

センター長の視点

平松幸三　ロンドン研究連絡センター長

グローバルに受け入れられるということ

映画作品には無声映画時代から音楽がつけられてきたが、トーキーになってからは、馬の蹄の音や鳴き声といった音＝環境音や音声が入れられるようになって、多くはアフレコするようになった。どのような音をつけるかは、「音響さん」と呼ばれるプロの腕の見せどころで、作曲行為でもある。国際的に著名な作曲家・武満徹が担当した小林正樹監督の映画「怪談」（1964）の音は、今、世界の音楽家たちに絶賛されていて、たとえば長らく家を空けていた男が荒れ果てた自邸に戻ったときに、朽ちた廊下を歩いて踏みぬいてしまうときの音は、恐怖感を倍加させるものだった。ロケで録音しては出すことのできない音で、今なら最高の映画音楽賞を受けただろう。

ハリウッドの主流とされる映画５０編ほどについてアフレコされた音の分析をした研究によると、ハリウッド映画のアフレコ音は概して定型的だ、という。例えば、アメリカの郊外の夏の夜だとクリケットが鳴いている。どこでもクリケットが鳴くわけでもあるまいに、そうなっている理由は、ハリウッド映画が世界中で上映されるため分かりやすくなければならないからだ、と言う。サブサハラのアフリカでも、極北でも、南米でも、クリケットのいない土地でさえも、聞いてそれと分かってもらえる音でなければならないのだ、と。

この話は、グローバル化とはどういうことかを物語る。要するに、分かりやすくなければならないということで、多くの人が、こんなものだ、と思うこと。つまり標準的、定型的で、かつ予想を裏切らないこと。ハリウッド、ハンバーグ、コーラなどは、第２次世界大戦後のアメリカ的生活様式の浸透、逆に言うと世界の人々のアメリカ的なものへの憧れが後押し、標準的になった。アメリカに対する好意的な印象が映画、食品、飲料の評価を高める。心理学でいう「後光（halo）効果」というものであろう。「日本人ってナマ魚を食べるの？」と40年前ストックホルムで暮らしていたときに気持ち悪そうな顔でたずねられた経験に鑑みると、現在のSUSHIブームは隔世の感があるが、SUSHIブームが起こった背景には、日本が経済大国になったことも与っている、と思う。それでもSUSHIだから国際的になれたのかもしれない。寿司についても「通」が薀蓄を傾ければきりがないけれど、よかれ悪しかれ単純化し、海外の味に慣れた人にも受け入れられるSUSHIにすることはできた。だが京料理はどうだろうか。すべてにわたって微妙・繊細で手がかかりすぎるのではないか。

そして大学だが、留学生の動向にも後光効果が見られる、というのは、日露戦争後、中国を中心としてアジア諸国から日本の大学への留学生が急増したことがある。昨今の政府の留学生３０万人計画の実現も、科学技術の高さと経済規模に裏打ちされる日本の国際的存在の大きさと無縁ではない。かれら留学生の出身国が圧倒的にアジア諸国であるのは地理的事情と、アジア圏内では日本の大学が、その地位を脅かされているとはいえ、今のところ比較優位を保っているからだ。

一方、欧米からの留学生にしぼって考えると、従来、武満徹的な高レベルの研究や京料理のような日本独特の学問のために留学した研究者は少なくない。だがその範囲では留学生数は伸びない。もっとふつうに留学してきてほしい。最近、イギリスの若者の間では日本文化についての関心がけっこう高く－これについてはアニメの功績も讃えたい－、一方イギリスの大学授業料の大幅値上げという背景もあって、日本への留学に興味を示す人も増えてはいる。実際、トップクラスの日本の大学の教育と研究は、国際的にみて、最高とは言わぬまでも決して平均以下ではないし、日本に研究留学した経験者は、声をそろえて日本を称賛する。それでもこちらで耳にするのは、多くのイギリス人にとって日本はまだミステリアスな国(=分かりにくい)だ、という声である。科学技術をはじめとする知的レベルの高さも感じるし、魅力的な国だが、日本社会はやっぱり別世界に映り、人生の貴重な数年間を日本で過ごしてよいのかどうか。その中に飛び込むにはいささかの勇気が要る、と言うのだ。そこにあるバリアは言葉だけではない。及ばずながらわれわれロンドンセンターも積極的に日本の事情の案内をしてはいるが、本国以外に米・加・豪といった選択肢のあるイギリス人にわざわざ日本に行ってもらうには、まだまだインセンティブが必要であることも実感する。

世界中の多くの人を惹きつけるには、日本の大学はハリウッド映画やSUSHIのように変わらなければならないのだろうか。変わるとすれば、何が求められるのか？確実に言えるのは、小手先の変化では通用しないということだ。ハリウッド映画はやはり本質においてすぐれたものがあり、SUSHIは基本的に健康食品―少なくとも油がギトギトしていない―という魅力がある。独自のものを維持しつつ国際的に通用するにはどうすればよいのか、思案している。

「現代社会における"育人"」
松本紘京都大学総長インタビュー

2011年秋、松本紘京都大学総長が訪英され、JSPS Londonにもお運びくださいました。創立以来、自由の学風のもと、自主自律の精神を理念とし、世界の先端的学術研究を推進する京都大学。そんな京都大学ならではの現代社会の要求に見合った人材育成、「育人」についてのビジョンを当センター長、平松幸三が伺いました。

現在の大学における研究の細分化とそれがもたらす自己矛盾、社会との隔離などを危惧され、その解決のための人材育成のプログラムなど、たっぷりとお話いただけました。

ー 「育人」と「教育」

平松：今回はご多忙の中、お運びいただき、誠にありがとうございます。折角の機会ですので、先生が常にその重要性を強調される人材育成についてお話を伺いたいと思います。私どもJSPSもポスドク以上の研究者を支援していますが、国際社会で活躍できる人材の育成がどうあるべきか、先生のお考えをお聞かせください。

松本：これはとても難しい質問ですね。というのも、JSPSさんの立場での人材育成と、私ども大学人が一般的に考えている「育人」には違いがあるからです。「教育」と言うと、いわゆる-教え育む-という解釈となり、どうしても上から目線が入りますが本来、educationとは、上から押しつけるのではなく、相手の持っているものを引き出す、という意味があるのです。これはラテン語の「educo＝引き出す」が語源となっております。日本では「教育」と訳したので上から目線っぽくなってしまっているのです。個人の持っているものを見つけ、引き出す事はとても難しいことです。大学だけでできるものではありません。小・中・高校、社会、そして産業界も一緒になって“育てる”ということに取り組まないと人は育たないと思います。

ー 大学において学問の専門化が加速する現状

松本：大学には、大学院以上ですと研究科があります。研究科では、それぞれ非常に狭い分野の、言ってみればスペシャリストを育てるのがミッションとなります。多くの大学では、研究室に学生を所属させて教員と一緒に、もしくは議論をしながらその分野の研究を更に進めるのが通常のやり方で、そこでは、研究が積み上がって、その先がわからないというところ、てっぺんまで到達します。それを更に掘り下げるというのが研究、特にドクターコースの研究テーマになる、と思います。存在する論文を全部調べ、あと何が残されているかを自分で考え、自分なりのオリジナリティをプラスしてみようと深掘りするところです。

言い換えますと、“人間とはなんぞや”、“宇宙とはなんぞや”という知識の好奇

松本　紘　Professor Hiroshi Matsumoto
京都大学総長。京都大学工学博士、京都大学名誉教授。京都大学生存圏研究所教授、教育研究評議員、理事・副学長等を経て、2008年10月より現職。専門分野は宇宙プラズマ物理学、宇宙電波科学、宇宙エネルギー工学。2004年英国王立天文学協会（RAS）外国人名誉会員（RASアソシエエイト）、2007年紫綬褒章受章。

心がそのルーツ、そして幹となっている大きな「知識の木」が、まずあります。そのうち哲学が発生して、哲学から自然科学的な物理数学、そして医学、一方では人間の心と考え方を探る思想が生まれ、社会科学、人文科学と枝が分かれていった。明治維新後、日本に近代的な大学ができて、人、法、文、理、医、工学などのいわゆる一文字学部が誕生しました。やがてそれが二文字となり、いまや10文字くらいの研究科ができている。今の時代においては、専門分野をどんどん細分化していけば、その研究内容を長く説明しなくてはならなくなっています。以前のように漠然と物理学とか人文学という訳にはいきません。京都大学においても1,000近い研究室があります。

これらの研究室がそれぞれ少しずつ違うのです。木で言うと、枝が伸びて、梢が伸びてきた。そのてっぺんに大学院生をのせて、もっと梢を伸ばせ、ということになる。学問は進み、各々頑張るので、梢はどんどん伸びる。知識はどんどん大きくなるが、さて、それが「育人」となっているか、というと少し疑問が残ると思う。非常に狭い領域を掘り下げる専門家になっていくことは必要なことでありますが、しかし必要ということが、かつ十分であるとはいえない。何か大きな世界的な問題、例えば、飢餓、パンデミックな問題、原子力発電所で起きるような大事故の問題、地球温暖化のようなあらゆるファクターが絡むような問題、水・食料の問題などは、どこかの分野のスペシャリストが何かを発言すれば解決する、というようなものではないですね。他分野の人たちが協力してやれば、解決できるかもしれない、という状態になっている。しかし現実には、それぞれの研究を邁進するばかりで、若い人たちが、全体を俯瞰して解決方法を発想する機会が与えられているかというと、私は無いと思うのです。そこで、学問の“その大本がなんぞや”ということをもう一度考え直す必要があると考えます。これを「務本の学問」と言います。

ー「務本の学問」

平松：「務本の学問」について詳しく教えてください。

松本：『論語』学而に出てくる“本を務（もと）むるの学”。つまり学問の大本とは何かを知ろうということです。研究の細分化が進む現在、あえてなるべく人文社会科学や理系だと言わずに、物事の大本のところで議論ができる人を育てる必要があるだろう、と思っているのです。こういう「育人」は、専門を深く研究している集合体となっている今の大学院だけではできない、と考えます。もちろん専門を伸ばして学問を進歩させるということも、これは大学の重要なミッションの一つです。しかし同時に社会から見ると、そういう専門家ばかりいても、何か問題が起こったときに具体的な解決策が提示されなければ意味がない、となります。例えば、今回の震災を見ても、専門家が“自分はその分野が専門でないから何も言えない”ということになり、解決の提案ができないでいたことを、社会は目の当たりにしました。

その点、昔の知識人達は知の幅がすごく広かった。明治の学者、寺田寅彦などがその典型といえるでしょう。彼は非常に文化的、哲学的な思想から科学に至るまで知っていたから、さまざまなところで幅広い意義のある発言をしてきました。現代はそういう研究者が減ってしまっています。学問が進歩した結果起こる自己矛盾が知の世界でみられるといえるでしょう。広範囲の知識を持っていて、学部で習うより深いレベルで研究し、それをこなして社会のために役立てられるような人材を輩出することが要求されているが、現状では大学としてはなかなか輩出できないでいる。

たまにそういう人材が出ても、それは個人の能力に負うもの。だから、社会で問題に対して胸を張って責任を取ること、これは非常にしんどいことですが、しんどい仕事に耐えられる人をつくる仕組みが必要だ、と思う。それに京都大学が取り組んでみよう、と思っている。

ー 京都大学の“育人”、「白眉プロジェクト」

平松：具体的にどのような取り組みをされていますか？

松本：二つのプロジェクトを始めています。一つは「白眉プロジェクト」で、これは、学部の枠を超えて京都大学が優秀

な若手研究者を採用して、5年間研究費とサラリーを支払い、他分野の人々と交流しながら研究に没頭する機会を提供するというもの。どの学部にも属してないので、学部の専門のことをやりたければやってもいいが、やる義務はありません。

このプロジェクトは 非常に若い世代、例えば20代後半から40歳程度まで、才能がうんと花開く時期に研究だけに没頭する人が一部いてもいいのではないか。そういう環境を大学が提供しましょう、というのが設立の目的です。今日の大学は教育機関ですから、研究成果を追求すると共に教育をしなければなりません。その際、研究室に配属されると、先生の手伝いや、その他研究室運営のための仕事など研究以外の仕事がどうしても出てきます。このプログラムはそういう時間をもたなくていいように、独立した研究者として若い人が5年間思いっきり研究に集中してくれさえすればいい、というプログラムなんです。

平松：どのようにして選考されるのでしょうか？

松本：選考は学部毎ではなく全学で実施するので非常に難しいものですが、変わった視点から人選を行っています。まず

京都大学の教員以外に、他大学の教員、産官界からも試験委員に入ってもらって評価をして頂いている。JSPSさんの理事長もお招きした。こういう人たちを「目利き」として“伯楽”と呼び、人選を行う機関を“伯楽会議”といっています。これは“千里を走る名馬がいても それを見抜く伯楽がいなければ、名馬も見つけられない”という「老荘思想」に依るものです。20人の枠に対して、全世界から約600人の応募があります。

平松：それはすごい数ですね。

松本：はじめは それぞれの専門家に書類選考でまず50人程度に絞ってもらう。そこで選ばれた50人は一応研究、発表ができる背景はもっているので、その中からどんな基準でどんな人を最終の20人に絞るかというのは、非常に難しいことです。そこで、社会の各層の方々のご意見を聞きました。世界で通用する人材を作るにはどういう視点で選んだらいいか、ということを基底に考えて頂き、私自身も各候補者と面談してその最終人選方法を決めるのです。

まず伯楽会議によるインタビューが1人45分。

平松：かなり長いですね。

松本：45分間、何人もの目利きから矢継ぎ早に質問を受ければ、用意してきた答えは枯渇します。そうすると最後は地金で勝負するしかなくなりますね。そうして最後に、10分～15分、45名ひとりずつ私が インタビューをします。これは、評判がいいか悪いか、わかりませんが、一番きついといわれています。

ー　日本人以外の応募、そして異分野の交流による研究成果

平松：皆さんわざわざ京都まで面接にくるのですか。

松本：そうです。 日本人以外の応募は5分の1くらいで、採用2～3割が外国からの研究者です。お金は京都大学で5年間払いますが、どの白眉研究者も研究はどこの大学にいってもらっても外国にいっても構わない。誰と研究してもよい。ただし、研究論文は京都大学白眉プロジェ

クトの成果として提出してもらう。視野の広い、お互いまったく違う分野の人たちがプロジェクトで議論しているので、とても良いようです。例えば、インド哲学を研究している人と医学の研究をしている人が議論するわけです。意欲がある人はこういう中からヒントを得るんですね。まったく新しい気づきが次々でている。つまり「務本の学問」、学問の本来のルーツに近いところで、才能を磨いて頂くという仕組みです。 今のところはうまくいっているかな、と思っています。

ー　地球社会に生きる“メソッド”を学ぶ場として新大学院「思修館」の設立

松本：もうひとつの取り組みは、大学院を新しく作るということです。専門の大学院はどうしても、穴掘りになる。そこであえて、穴は掘らなくてよい。穴を掘る技術だけを身につけて、もっと広い視野を持つべく幅広い高等教育を身につけて欲しいということを目的とします。5年間一貫教育で最初の2年間は研究として穴掘りの技術を身につけることとし、研究室に入って何かしらの論文を書き上げてもらいます。フィールド調査は例外ですが、実験や理論計算などは2年で学位論文の草稿を書いてもらうことが可能です。そして3年目には論文をまとめられる仕事をしながら、必須として8分野の授業を受ける。理工学、医学、生命科学、法経、社会科学、教育分野、言語学、芸術・体育。言語については英語はもちろん、第二第三外国語もやって頂きたい。これはかなり厳しいので毎年20人のうち半分くらいしか残らないかもしれない。しかし、これを頑張り抜けば、世界のリーダーとしてやっていける自信ができる。4年目は海外での研究に出てもらい、5年目に京都大学に戻ります。将来のリーダーを目指す分野の人たちは実践することが重要ですから、プロジェクトを3つ立ち上げ、 3ヶ月ずつくらいで実践してもらう。企画、資金集め、人集めなどすべて自分で行い、大学はこの最後の段階では一切支援しません。プロジェクトによって数百万のものもあれば、1,000万単位のものもあるでしょう。それをどう形にするかは本人の器量次第です。ともかく短時間で実践することを課して社会に送り出す。そういう大学院教育を目指します。

平松：後者のプロジェクトの内容は、英国の大学の教員評価の項目にあてはまります。イギリスでは教員がいかに自分のプロジェクトに資金集めができるか、それで教育ができるかということが重要な評価の対象となります。

ー　幅広い“知”をもった知識人の育人の大切さ

松本：そうですか。私は、みんな能力は持っている、と思っています。ただ、研究の最先端を掘れ掘れと言われるものだから、そこに集中してしまって、どうしても世界全体が見えなくなってきているのです。論文は書けるが行動は起こせない、という人が、学位を持った人に多いのが現状です。ですから、産業界にしても官界にしても人材を求めるにあたり、そんなドクターは必要ありません、マスターか学部卒でもよいとなってきているのです。一方、世界各国で博士号を持った方々をたくさん見てきて感じるのですが、外国の方は専門の知識はもちろんしっかりあって、その上にバックグラウンドの知識も豊かであるということです。ラテン語とまではいかなくても教養はあるし、歴史や音楽、芸術の話もされます。我々日本で育った研究者はそういうテーブルでは、寡黙になるんですね。例外の方もいらっしゃいますが、一般的に日本人はそういう時はしゃべらない。世界のグローバル化された社会の中で、そういう人たちがリーダーとして外国人を使いこなしていけるのか？そういう気持ちがありますから、幅広い知識を養うためにも、先程申し上げた芸術も必須にしようというのです。

伝統を活かし、現代社会に合った京都大学ならではの人を育てる“育人”の取り組みを、「白眉プロジェクト」と「新大学院設立」という2つのプロジェクトを柱に、説明させていただきました。

平松：貴重なお話をありがとうございました。

（聞き手より）

人材育成にかける松本総長の熱意がびしびしと伝わってくるインタビューだった。総長は、広く世界に打って出る人材を育てる必要を強調されたが、それは学問においても同じで、いわゆるタコ壺的研究をしていては、視野の狭い人間にしかならず、結局は世界に通用する独創的な仕事はできない、と繰り返し語られた。京都大学の新大学院と白眉プロジェクトは、その実現のためのある種実験的ともいえる施策で、大いなる成果を期待したい。

平松　幸三
Professor Kozo Hiramatsu
日本学術振興会ロンドン研究連絡センター長。京都大学工学博士、京都大学名誉教授。武庫川女子大学教授、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授等を経て、2010年5月より現職。専門分野は音響環境学。

英国内8大学にてJSPS事業説明会開催

松尾国際協力員によるプレゼンテーション　右はプレゼン内容を手話で通訳する職員
（University of Bristol）

2011年10月11日のLondon School of Hygiene and Tropical Medicineから、11月9日 University of Dundeeまで、英国内8大学を訪問しJSPS事業説明会を開催した。学生数約3万人を擁する英国屈指のマンモス大学から、Scotlandの専門技術者養成カレッジ（詳しくはP10「FOCUS」に掲載）まで、性格を異にする様々な大学を訪問しJSPSの事業紹介を行った。訪問を通じて、各大学が独自の歴史や文化、地域性、立地、規模などそれぞれの特性を活かした戦略を立案し運営につなげていることを感じた。

各事業説明会では、冒頭に平松センター長による挨拶の後、JSPS活動概要説明、及びフェローシップ事業の紹介がなされた。

10月13日に事業説明会を行ったUniversity of Wales, Trinity Saint David at LampeterはWales西部に位置する大学。BBC Wales のラジオ支局をキャンパス構内に持ち、大学内のメディアセンターはメディア学や映画・テレビ学の講義を中心に利用されている。学位授与権を有する大学のうち、EnglandとWalesの中ではOxbridge[1] に次いで歴史がある。Swansea Metropolitan University他3カレッジと統合するまでは、ヨーロッパにおけるPublic Funded[2] の最も小さな大学とされる。人口約4,000人の小さな町に位置し、直近の駅まで20マイルも離れた場所にある静かで自然豊かな大学である。

翌10月14日に訪問したUniversity of Bristolでは、参加者が約50名にも上った。JSPS事業に対する注目度もさることながら当日驚かされたのが、当たり前のように手話の通訳者が配置されていたこと。参加者を見渡すと、手話通訳者の正面最前列に耳の不自由な出席者が座って説明に集中していた。1名のために、2名の手話通訳者が用意される。英国社会の中で"Fair" であることは広く浸透しているが、高等教育の現場でも"Fair Access"の原則[3]が徹底し、その具体化した姿を目のあたりにした瞬間だった。気候変動や情報通信技術、複合材料等の分野で京都大学との連携を模索する研究者の参加もあり、JSPS の事業に関する数多くの質問が寄せられた。

事業説明会の中ではJSPS London職員による事業紹介と併せて、過去に本会事業を利用して日本で研究を行った経験がある元JSPSフェローの体験談を設けている。実際に英国から日本へ渡って研究を行った体験者の話は多くの参加者を惹きつけるとともに、日本での失敗談は会場を笑いで包み込み、本会事業に関心のある参加者は体験談を通して日本での研究や日常の生活を容易にイメージできるのだ。University of Bristolの事業説明会で日本での体験を語ったDr Alex Malins, School of Chemistry（2010年度外国人特別研究員事業（欧米短期）採択者）のプレゼンテーションでは、最新の研究設備の下で高度な研究ができたことや、ラボ内の雰囲気、学食や居酒屋での食事、お金に関すること（"Cash is King!"）[4]、西洋文化との生活スタイルの違い、日本文化や伝統芸能との触れ合いなどが躍動感を持って伝えられた。

なお、JSPS Londonが募集を行った外国人特別研究員事業（欧米短期）（12月1日締切）には、今回事業説明会を行った大学から5件の申請があり、自分の初めてのプレゼンが伝わり、会場にいた研究者に実際にアクションをしてもらえて嬉しい。

（松尾）

---

[1] University of Oxford 及び University of Cambridge を指す。

[2] 国から資金の提供を受ける大学。英国大学のうち University of Buckingham のみ国の援助を受けていない Private University とされる。

[3] 英国内では通常、各大学が OFFA (Office for Fair Access) との間に "Access Agreement" を締結し、高等教育への公平なアクセスを保護・促進するという文脈で使われるが、本文では大学内においても公平な機会が与えられているという意味で使用した。

[4] 英国では至る所でデビットカード又はクレジットカードが通用する。日本では英国ほどカードが普及していないため、現金がより通用性があることを表現したもの。

【表】2011年10～12月　JSPS事業説明会実績

開催日	開催場所
11月 9日	University of Dundee
11月 8日	University of the Highlands and Islands, Perth College
11月 7日	University of Edinburgh（Scottish Agricultural College との共催）
10月26日	University of Birmingham
10月18日	University of Sussex
10月14日	University of Bristol
10月13日	University of Wales, Trinity Saint David at Lampeter
10月11日	London School of Hygiene and Tropical Medicine

日本での体験談を語る Dr Alex Malins（University of Bristol）

科学とアートを融合させた企画展 “Air Pressure”開催中

開催期間：2011年11月4日（金）～
2012年2月12日（日）
開催場所：Whitworth Art Gallery,
University of Manchester

このたび、平松センター長がDr Rupert Cox, University of Manchester（JSPS英国同窓会会員）及びDr Angus Carlyle, University of Arts Londonと、Wellcome Trustの支援を受けて行う共同研究について、"Air Pressure" と題した展示が上記の期間・場所で開催されている。

本展示は、会場内に設けられた特別ブースの中で、来場者が臨場感のある映像や音とともに成田空港周辺地域の住民の日常を体感できるというもの。ブース内では、スクリーンに映し出される映像とともに8個のスピーカーが使用され、私たちの視覚及び聴覚に訴えかける工夫が施されている。12月には、当ギャラリーの月間最高入場者数を記録するほど、人気のある展示となっている。

英メディアThe Guardianや地元紙Manchester Evening Newsにも取り上げられ、The Guardianには、「その映像表現によるインパクトは、学問的な成果に加えてアートとしても見事な作品（as an artwork, its audio-visual impact is more spectacularly immersive than academically informative)」と掲載された。

なお、本展示に関連して、2012年1月5-6日にはシンポジウム"Risky Engagements: encounters between science, art and public health"を開催。シンポジウムの様子は、次号に掲載する予定である。

※本展示の詳細はこちら

（加賀）

JSPS London | VOL 31 | OCT - DEC 2011

郵便ポストのレリーフ

平松幸三の ご存じですか？

今年は女王エリザベス2世が即位して60年目の記念すべき年である。右下の2枚の写真を見比べていただきたい。上はロンドンで、下はエジンバラで撮った郵便ポストだ。英国郵便はRoyal Mailだから、ポストには王冠と君臨する王の略称がレリーフされていて、ロンドンのものには現女王と王を意味するR（EIIR）が刻まれている。ところがスコットランドにはそれがない。スコットランドでも先王まではちゃんと刻まれているから、現女王に限って略称がないのである。理由は、エリザベス2世という女王名がスコットランドで問題となったからだ。スコットランドでは、過去にエリザベスという女王がいなかった。1世の在位中は、スコットランドとイングランドは別の王国で、1603年に1世が死去した後、スコットランドのジェームス6世がイングランドの王を継承してジェームス1世を名乗り、同君連合体制を築いた。「王冠連合」と呼ばれる。その後1707年に連合してグレートブリテン王国となり、今の連合王国体制が始まった。だからエリザベス2世をスコットランドで名乗ることは、1707年連合法違反であるとして訴訟まで提起された。その主張は退けられたが、過激な人たちがEIIRの刻まれたポストを破壊したり、レリーフを削り取ったりしたために、スコットランドでは王冠だけになっているのである。折しもスコットランドの独立が英国政治の大きな問題となりつつあるが、郵便ポストにまで影響が出るほど、両国は緊張関係にある。

ロンドン

エジンバラ

「イケてる」スペシャリストを養成
"University of the Highlands and Islands" A to Z

13のカレッジの所在地（UHIウェブサイトより引用）

美容師、グラフィックデザイナー、フレンチシェフ、レコーディングプロデューサーなどという肩書を耳にすると、「イケてる」職業というイメージを持ちますが、スコットランドにそういったスペシャリストを養成するためのユニークな大学があります。その名も"University of the Highlands and Islands（ハイランド＆アイランド大学。以下「UHI」とする。）"。お酒好きの方にとっては、スコッチウイスキーの芳醇なピート香が漂ってきそうな名称ですが、UHIは、スコットランド北部に点在する13のカレッジによって形成されたひとつの大学です。

筆者らが訪問したパースカレッジは、UHIの中でも最大規模のカレッジのひとつで、パートタイムを含めて約10,000人もの学生を擁しており、航空機工学からオーディオ工学、山学、通訳管理、観光・ホスピタリティにおよぶ広範かつ特色ある専門コースが展開されています。学内には、美容室や調理室、レストラン、マッサージルーム、アトリエ、録音スタジオ、ライブ会場などの多様な実習施設が整備されており、ファッショナブルな学生たちが、「イケてる」スペシャリストを目指して日々技を磨いています。実学中心で専門的なスキルを身に付けることを主目的とした学習スタイルは、日本で言うところの専門学校と言えるでしょう。

スコットランドの高等教育は、イングランドとは異なるシステムを持っています。一般的な学部教育は4年制であり（イングランドは3年制）、イングランドでは授業料が最高9,000ポンドに引き上げられる一方で、スコットランドでは、自国出身学生の授業料は無料となっています。

スコットランドには、学位授与機能を有する「大学」が15校ありますが、UHIは、2011年に学位授与権を認められた最も新しい大学です。もともと、スコットランド北部のハイランドと呼ばれる地方には、継続教育カレッジ[1]は点在していたものの、UHIの創設を見るまで大学は1校もありませんでした。このため、高学歴志向の若者達がグラスゴーやエディンバラなどの都市の大学に進学し、卒業後も都市部で職に就いて故郷には戻らないという事態が深刻化しており、ハイランド地方に若者を定着させて地域活性化を図るためにも、大学の設置というのが積年の希望だったのです。ところが、個々の継続教育カレッジを単独で大学に昇格させるほどの人的・物的インフラを整えるのは困難でした。そこで、点在する13の継続教育カレッジによって連合体を形成し、学位授与サービス機関との協定で学位を授与できる高等教育機関UHIを1998年に創設、その後、2011年には、学位授与権を持った「大学」として再出発することとなったのです。

現在、UHIでは、高速データ通信を可能とするネットワークシステムが整備され、学生は通学のために居住地や職業を変えることなく、異なるカレッジ間の科目履修なども可能とするフレキシブルな学習環境が実現しています。

スコットランドでトップクラスの性能を誇る録音スタジオ

敷地内にはモダンな学生寮が完備されており、豪華なフレンチでお腹を満たし、音楽や絵画などの芸術に触れ、斬新なヘアスタイルにも挑戦して、マッサージで疲れを癒す・・・洗練された生活がまるごと詰まった大学連合体、日本の大学にとっても他との差別化を図るひとつのモデルになるのではないでしょうか。

（高橋）

[1] 義務教育を終え大学に進学しない人のための継続教育機関。"University（大学）"とは異なり、基本的には独自の学位授与機能を有さない。実践的かつ専門に特化した内容で、ビジネス、デザインなど職業や就職との関連が強いコースが多い。

【参考文献】
・UHIウェブサイト（http://www.uhi.ac.uk/en）
・UHIブローシャー
・"Good University Guide 2012"（The Times）
・スコットランド政府Webサイト（http://home.scotland.gov.uk/home）
・ハイランド＆アイランド大学の実践－"テクノロジーで学ぶ"大学－（2002年 瀬田 智恵子）
（http://socyo.high.hokudai.ac.jp/Journal/J10PDF/No1010.pdf）

Pre-Departure Seminar and Alumni Evening

2011年10月21日、JSPSフェローシップ事業の採択フェローを対象とした、Pre-Departure SeminarがJSPS Londonで開催された。本イベントの目的は、新しく採択された英国内のフェローが、事業を最大限に活かせるような情報提供を行い、同時期に採択されたフェローとの交流を促すものである。セミナーは平松センター長の開会挨拶に始まり、メインゲストである京都大学・松本紘総長のスピーチと続いた。松本総長は、異なるレベルで発生する課題に対処するには科学における国際交流が重要であること、また今一生懸命研究することが、将来大きな成果につながるということに触れ、来日前のフェローを激励された。次に、参加者1人ずつの自己紹介と続き、研究分野や派遣先のホスト機関などについて自己紹介を行った。

プレゼンテーションセッションでは、最初に、齋藤副センター長がJSPSの概要及びフェローへの支援内容について説明した。2番目は、同窓会会員のDr. Alessandro Devoto, the School of Biological Sciences, Royal Holloway, University of London （2010年度外国人招へい研究者（長期）採択者）が、示唆に富む体験談を発表し、日本で暮らす外国人がよく経験する失敗とその克服方法などの実用面に至るアドバイスもなされた。セッションの後半では、英国内の学術振興機関である The Royal Society と Biotechnology and Biological Sciences Research Council （BBSRC）からDr. Hans Hagen, Scheme Manager, Grants 及び Dr. Andy Boyce, International Relations Manager より、フェローが日本との共同研究を継続するための支援事業などについて紹介があった。

FURUSATO Award に採択されたDr. Robert Edgington, University College Londonと平松センター長

最後の質疑応答セッションでは、ビザ取得、日本での住居、滞在費の支給や自然災害発生時の一時帰国制度など、多くのフェローが気になる点についてよりクリアにすることができた。

Pre-Departure Seminar and Alumni Evening参加者全員と

続いて、2011年度英国同窓会支援事業採択者の授賞式が行われた。日本への再来日を支援するFURUSATO Award及び BRIDGE Fellowshipにそれぞれ6名と3名、 そして日英間のシンポジウム開催を支援するスキームである Symposium Scheme for the UK-JSPS Alumni Association には1件が採択された。授賞式では、平松センター長から各受賞者に賞状と副賞が手渡され、受賞者はプログラムの実施による成果を一言ずつコメントした。

授賞式終了後には、新しく派遣予定のフェローと同窓会会員の交流を目的としたAlumni Evening が催された。Dr. Justyn Regini, School of Optometry and Vision Sciences, Cardiff University を招いて「モネのアートと視覚」に関する特別講演を行った。また、イベントの間は随所で日本での生活や研究室の様子などの情報を交換する光景が見られ、セミナー参加者からも、「初来日の研究者への情報提供だけでなくアルムナイとの情報交換があったのは大変役立った」「JSPSスタッフはあらかじめ私たちが知りたいことをわかっているかのようにすべての疑問に答えてくれた。」「セミナー前に抱いていた不安が消え去り日本での経験が楽しみになった」といった声が聞かれるなど、多くのフェローが来日にあたっての不安を少しでも和らげられたのではないだろうか。

※Pre-Departure Seminar and Alumni Eveningレポート全文はこちら

（Watson）

日本留学フェア "Experience Japan Exhibition" 開催

ブースにてフェローシップ事業の説明を行う加賀国際協力員

2011年11月25日、ロンドン市内にあるThe Royal Society内Wellcome Trust Lecture Hallにて開催された、"Experience Japan Exhibition -An introduction to study abroad and other opportunities in Japan-"に、JSPS Londonとして参加した。このイベントは、主に英国と近隣のヨーロッパ諸国の高校生、大学生らを対象として、日本への留学やJapan Exchange and Teaching（JET）プログラムなどの留学以外で日本を体験できるプログラムに関する情報、また日本への関心を喚起する機会を提供することを目的として企画・開催された。

当日は、文部科学省事業「国際化拠点整備事業（大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業、通称グローバル30）」採択校をはじめとする日本の17大学に加えて、JSPS などの3機関が個別説明や資料配布などを行った。また、ブースとは別エリアでセッションプログラムも催され、日英双方の学生が日本の大学の特徴についてフリートークをしたり、日本で働いている英国人が体験談を語るなど、日本への留学や就職を考えている参加者にとって興味深いテーマが取り上げられた。当日は、東北大学の木島明博総長補佐も来英され、東北大学やその周辺地域が東日本大震災後、どのような復興の道を歩んできたかをテーマとした講演もあった。

今回は、高校生や学部学生がメインではあるが、中には博士課程学生やポスドクの参加者もあり、日本で研究するためのフェローシップを探してJSPSのブースを訪れる者もいた。JSPSフェローシップ事業の中では特にサマープログラムが人気で、長期で英国を離れることが難しい大学院生なども、夏の期間に日本の文化に触れ、かつ日本のホスト研究者と出会い、今後のコラボレーションのきっかけをつかむ機会が提供される点を魅力的に感じる参加者が多くみられた。

本イベント開催中、会場は学生だけでなく、日本へ興味を持つ多くの方で終日賑わい、総勢475名もの参加者があった。日本語能力が障壁となり日本への留学等を躊躇している学生らに対して、近年は上述の文部科学省事業をきっかけとし、日本国内でも英語で学べる機会が増えていることを周知するとともに、参加者との対話や情報提供により東日本大震災以降の日本に対する不安を緩和する有意義な場となった。アンケート等でも、「たくさんの有益な情報を得ることができ、興味深いイベントだった」「日本の大学関係者から直接話を聞けてとてもよかった」「JSPSのフェローシップ事業に応募したい」といった声が聞かれるなど、盛況のうちに幕を閉じた。

（加賀・鈴木）

大勢の参加者でにぎわうフェア会場

JSPS London Interview

The 絆 kizuna

【略歴】
山口　裕史
（やまぐち　ひろし）
2007年4月よりJSPS東京本部での勤務を経て、2008年4月よりJSPS London に国際協力員として着任。日本帰国後は、名古屋工業大学研究支援チームにて、競争的資金業務に従事。

伝えるべきものは形あるものだけではありません。我々が獲得した知識や経験、そして思いもまた次の世代に伝えてゆかなければならないものです。先輩たちへのインタビューを通して、ロンドンセンターの過去・現在・未来へと続く「絆」を手繰り寄せます。

第三回は、2008年度国際協力員、現名古屋工業大学の山口裕史氏にお越しいただきました。

聞き手　加賀（国際協力員）、松尾（国際協力員）

ー 赴任当時を振り返って、よかったこと、大変だったことを教えてください。

センター長が「センター本来の仕事」に専念できるように、その下支えをしっかり行うことが、自分の重要な仕事の一つであった。センター長が多くの関係者と会われる際の下準備は、情報の質・量が伴うもので大変だったが貴重な経験。その仕事を通して英国社会を理解していくことに繋がった。また、初の日英学長会議の事前準備や調整、運営など、センター総力を挙げて取り組んだことも大変だったが、多くのことを学んだ。

また、ロンドンという世界都市に住めたこともよい経験であった。最初は英語がうまく聞きとれず、特にロンドン独特のコックニー訛り（ロンドンの下町言葉）には苦戦したが、ロンドンの中でも住んでいる地域や階級によって話す言葉が異なるということを身を持って感じることができた。自分もきれいな会話ができるよう努力した時もあったが、途中からは「通じさえすればいい！」と開き直り、言いたいことを伝えるようになった。月例報告書にも「きれいな英語にばかり触れていても上達しない」と書いた記憶がある（笑）。

ー 在任時の経験を、その後どう活かされていますか。

良くも悪くも、物事を決めつけて話さないようになった。というのも、例えば日本では100%を求められる事柄も、英国では筋が通っていれば70%～80%程度でOK・・など、日本で当たり前だと思っていたことが、英国ではそうでないということを多く経験した。赴任当初はその違いに戸惑ったが、確かにロンドンには世界中から人が集まり、多様な価値基準が存在するのは当然のこと。そんな環境にいると、「これが正しい！」というものは主観的なものであることを感じ、多様な考え方を柔軟に受け止められるようになっていった。その代わり、帰国時には「日本では当たり前」の状況に逆カルチャーショックを受けることになった（笑）。

ー 現在のお仕事について教えてください。

現在は競争的資金等の外部研究資金を担当。文部科学省やJSPSに限らず、他省庁の研究費やプログラムにも関わっている。JSPSの研修には、当時大学で活発になっていたダブルディグリーや国際共同研究、国際知財等にも対応できるようになりたいと願い、手を挙げた。研修後は、大学の国際担当職員として部署の責任ある判断をするためには、大学の様々な部署でより広範な知識を持つことが重要であると考え、現在は研究担当部署にて経験を積んでいる。

ー 先輩からロンドンセンターの果たすべき役割と応援メッセージをお願いします。

ロンドンセンターの果たす役割は、間違いなくヨーロッパの学術の中心地の一つであるロンドンにおいて、「英国における日本の学術のプレゼンスを向上させること」だと考えます。

在任中にいただいた言葉に、「ブリティッシュ（英国人）になることは難しいが、ロンドナー（ロンドン市民）になることは容易い」というものがあります。自分が何人であろうと、ロンドンにいてよいということ。世界中の人が集まる大都市にいる長所を存分に生かし、より多くのものを柔軟に吸収し、発信していってください。

第8回日英科学技術協力合同委員会

2011年11月28日、ロンドンにあるBIS Conference Centreにおいて、渡部和男外務省科学技術協力担当大使及びジョン・ベディントン英国政府主席科学顧問兼科学技術庁長官（Professor Sir John Beddington CMG FRS, the UK Government Chief Scientific Adviser）の共同議長の下、日英科学技術協力協定に基づき設置された日英科学技術協力合同委員会の第8回会合が開催され、JSPS東京本部から田淵エルガ国際事業部参事、関戸紀子国際事業部研究協力第一課係員、JSPS London から平松幸三センター長、齋藤智副センター長が出席した。今回の合同委員会では、両国の最近の科学技術政策上の重要な動き、特に環境・エネルギー、人材流動、産学官連携、大型施設等に関する取組について情報交換を行うとともに、双方の科学技術協力の現況が確認された。また、今後の両国の協力強化については、研究者を主体とした専門家による会合を開催し、今回の合同委員会において日英間での研究協力を検討する対象として取り上げられた環境・エネルギー、気候変動及び高齢化社会といった地球規模の主要課題を扱う領域について、より議論を深め、協力対象を特定していくこととなった。一方、田淵国際事業部参事からは、JSPSの事業紹介、G8 Research Councils Initiative のプレゼンテーションがあった。また今回の合同委員会を機にRCUKとのサテライトミーティングにて個別に意見交換を行った。

（齋藤）

田淵国際事業部参事によるプレゼンテーションの様子

ぽりーさんの英国玉手箱

tamatebako

Q 英国人はどのようにして年末年始を過ごすのでしょうか？

大晦日には年越し蕎麦を食べて除夜の鐘を聞き、正月には門松や注連縄（しめなわ）を飾り、お餅やおせち料理を食べ初詣へ・・というのが一般的ですが、英国では何か特別な行事や料理、アイテムなどがあるのでしょうか？

A クリスマスや新年の時期、英国では特に決まった行事や料理などはありません。というのは、さまざまな宗教があり、人々は各々のしきたりに従って過ごすからです。この時期、各家庭では違ったデコレーションやプレゼント、料理、エンタテインメントなどが楽しまれ、それぞれ深い歴史や意味が込められています。しかしながら、バックグラウンドにかかわらず、英国の年末年始休暇は、誰もが友達や家族と一緒に和やかな時間を過ごす、とても貴重な時間。1年間の忙しい日々が終わりを告げるこの時期に、私たちは次の年に向けてのよい気分転換ができます。また、公共交通機関や他の公共サービスのほとんどが、クリスマス（12月25日）やニューイヤーズデイ（1月1日）には休止となります。英国では、国全体が一斉に休みとなるこの休暇が大事にされるため、人々はたとえ電車が止まっても困らないように、早い人は11月から着々と年越しの準備を進めてゆくのです。

日本人の素朴な疑問に英国人ぽりーさんが答えてくれます。なにか疑問に感じたら、①氏名②所属③住所④質問事項を明記のうえ、ニュースレター編集室 enquire@jsps.org まで、お送りください。質問採用者には粗品を差し上げます。

JSPS London | VOL 31 | OCT - DEC 2011

2分でわかる英国高等教育改革のいま【1/3】

Point

- **2012年9月入学生の争奪戦が激化**
- **高等教育セクターの自由競争を促す規制緩和策が徐々に具体化**
- **入学出願に関する新制度案、3つの異なる出願受付期間を設定**

Introduction

英国政府は、2011年6月28日に発表した高等教育白書"Students at the Heart of the System"[1]に基づき、多角的に高等教育改革を進めつつある。とりわけ、

1. 2012学事年度における追加定員枠の導入
2. 高等教育セクターの競争を促進するための規制緩和
3. 平等な進学の機会を提供し、アクセスの拡大を図る入学出願制度改革

の3テーマについては着実な進展が見られる。本報告においては、テーマ別に、それらの進捗状況に関するポイントを紹介したい。

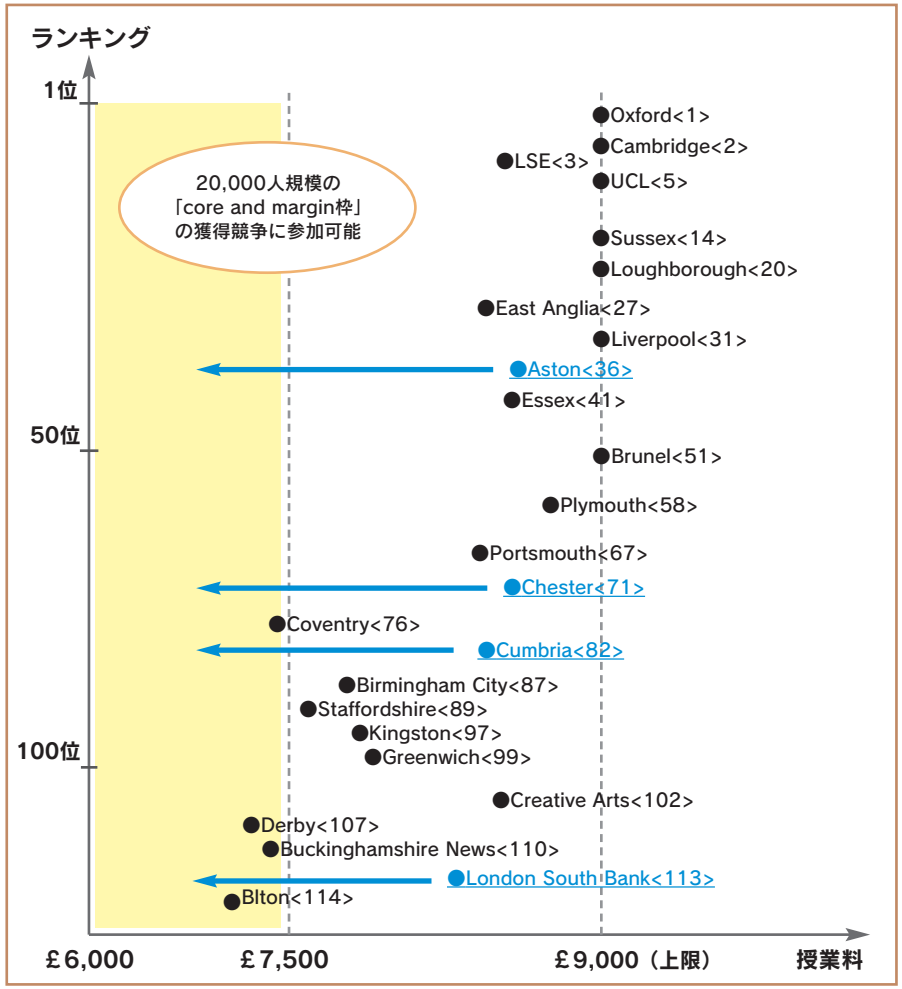
1. 追加定員枠の導入

(1) 背景

高等教育白書においてBIS[2]は、2012学事年度から、併せて85,000人規模の2種類の追加定員枠の導入を提案した。そのうちの一つである「Core and margin枠」は、年間授業料が£7,500以下であり、授業料に見合う価値や質について一定の基準を満たす大学及び継続教育カレッジ（以下「大学等」という。）に対して、最大20,000人の学生を競争的に受け入れることを認める制度である。同白書では、この追加枠を創出するため、全ての大学等の定員を7～9%削減することを示している。政府がこの制度を提案した背景には、4月19日にOFFA[3]が大学等からの提出を受け付けたアクセスアグリーメント[4]において、年間授業料を上限額の£9,000に設定しようとした大学等の数が政府の予想を遥かに超えていたことがあり、政府は、大学等に授業料値下げを再検討させるインセンティブとして、追加定員枠の導入を提案するに至ったと考えられている。

もう一つの追加定員枠とは、統一入学試験「Aレベル」において、A二つとB一つ以上という好成績を収めた生徒、最大65,000人を大学等が競争的に受け入れることを認める「AAB枠」である。

これら2種類の追加定員枠の提案には、進学の選択肢を増やすと同時に、高等教育セク



【図】イングランドの大学の授業料とランキングの相関関係

<注>
※1 授業料を_6,000以上に設定し、OFFAとアクセスアグリーメントを締結した大学（略称）を例示
※2 ランキングは、The Times紙による英国内の大学ランキング "Good University Guide 2012" を使用
※3 大学名称の後の< >内は、ランキングにおける順位を示す
※4 授業料は、（授業料免除を加味しない）全コースの平均授業料を示す
※5 青字は、アクセスアグリーメントの再申請を行い、授業料を値下げ（金額は不明）した大学を示す

---

[1] 高等教育白書 "Students at the Heart of the System"
[2] Department of Business Innovation and Skills：ビジネス・イノベーション・技能省
[3] Office for Fair Access　高等教育への公平なアクセスを保護・促進する役割を担う非政府公的機関
[4] 2012学事年度から£6,000を超える授業料を課す大学等は、高等教育へのアクセス拡大のための方策についてOFFAと合意（Access Agreement）を結ぶことが義務付けられている

2分でわかる英国高等教育改革のいま【2/3】

ターに、新入生を奪い合うという市場競争原理を導入しようという政府の狙いがある[5]。

(2) 進捗状況

10月17日、HEFCE[6]は、「Core and margin枠」を獲得するための申請方法について、申請資格や該当コースの条件、審査基準などの詳細情報を公表し、申請受付を開始した[7]。応募は11月11日に締め切られ、11月14日にHEFCEは、202の大学等から35,811人分の申請があったことを発表した[8]。今後、同機関による審査が行われ、その結果は、2012年1月から2月初旬に発表される予定である。また、11月23日には、HEFCEによって実施されていた教育助成金と入学定員管理に関する意見募集の結果と、それを受けたHEFCEとしての対応方針が同機関より発表され[9]、例えば、「core and margin枠」にロンドンを対象とした新たな傾斜配分を導入するなど、運用に関する詳細な説明が盛り込まれた。

一方、11月7日、OFFAは、24の大学及び3つの継続教育カレッジが、アクセスアグリーメントの内容変更を求めて再申請を行ったと発表した[10]。これには、年間授業料を£7,500以下に値下げすることで「core and margin枠」の獲得資格を得ようという申請機関の狙いがある。その後、OFFAは申請内容の審査を行い、12月2日に、25の大学等[11]に対してアクセスアグリーメントの改正を承認する旨の発表を行った[12]。

(3) 関係者の反応

白書発表以来、追加定員枠の導入に関しては、報道機関や大学等から軒並み後ろ向きな反応が寄せられてきた。「Core and margin枠」と「AAB枠」に共通する点としては、4月に大学等の授業料設定を締め切った後、6月末の白書発表をもって同制度を初めて提案したというタイミングについて批判がなされている。2012学事年度開始コースのUCAS[13]に対する出願締切が間近に迫る中[14]、学生獲得競争に勝つために、多くの大学等が授業料値下げの検討を余儀なくされ、大学等が12月まで授業料を確定できなかったことが、出願予定の生徒やその家族などに混乱と不安をもたらしたとの指摘がなされてきた。この点については、英国議会下院のBIS特別委員会が11月10日に公表した報告書[15]においても言及されている。同報告書では、追加定員枠の導入により、伝統的な一流大学と職業訓練を重視した継続教育カレッジなどとの二極化の進展が懸念されるとして、授業料値上げが実施される本年9月から1年間は導入を見送るべきであるとの主張がなされている。

また、授業料上限の£9,000あるいはそれに近い額にまでに値上げすることを決定した、いわゆる一流大学以外の大学等が、最も同制度の煽りを受けるとの意見も多い。Russell Group[16]などの一流大学では、「AAB枠」を活用して優秀な学生を呼び込めると予想されるのに対し、優秀な学生を惹きつけるのが難しいにもかかわらず、授業料を限度額付近まで引き上げてしまった大学等にとっては、いずれの追加定員枠における競争にも参加できず、2012学事年度には新入生を大幅に減らす可能性が懸念されている。関連して、中堅層の大学側からは、成績の芳しくない学生を受け入れる大学こそ一流大学に比べて教育コストを要することに加え、「Core and margin枠」で学生を獲得するには、£7,500以下まで授業料を引き下げなければならず、それを賄うために職員カットなどを余儀なくされる恐れがあるという声[17]も挙がっている。

2. 規制緩和

(1) 背景

高等教育白書には、規制枠組みの弾力化方策として、例えば、学位授与権の取得と更新に関する仕組の単純化や、小規模機関の参入を容易にするための「大学」と称する基準の見直しといった、透明性の高い単一かつ明確な枠組みの検討、リスクに基づく質保証システムの導入などといった内容が盛り込まれた。

これらの提案の背景には、上述の追加定員枠と同様に、高等教育セクターにおけるより適切な競争を促進させるという政府の狙いが考えられる。

(2) 進捗状況

高等教育白書で取り上げられた規制緩和策に関して、8月4日、BISが意見募集を開始した[18]。意見募集における主な論点は以下のとおり。

① 現行法を改正し、HEFCEを主要な規制機関と定めるための新たな法的枠組みを導入

② 全大学等を対象に6年おきに実施されている質保証のためのモニタリング

---

5 2011学事年度までは、HEFCEが大学等毎に定員を設定してきた

6 Higher Education Funding Council for England：イングランド高等教育財政会議　イングランドの大学等に基盤的経費（教育資金及び研究資金）の配分などを行う機関

7 Student number controls for 2012-13-Invitation to bid for student places (17th Oct)

8 Bids received for 35,811 'margin' places (14th Nov)

9 Teaching funding and student number controls consultation outcomes (23rd Nov)

10 Twenty-seven institutions submit revised access agreements for 2012-13 (7th Nov)

11 内訳は24の大学と継続教育カレッジ1校

12 OFFA announces decisions on revised 2012-13 access agreements (2nd Dec)

13 University & College Admissions Service：大学・カレッジ入学サービス　高等教育機関へ進学する際の出願に関する処理を行う機関で、進学希望者や高等教育関係者への情報提供サービスなども行う

14 出願締切は1月15日（医学・獣医学のコースや、オックスフォード大学及びケンブリッジ大学の全コースは、出願締切を10月15日と早めに設定）

15 下院BIS特別委員会による報告書 "Government reform of Higher Education"

16 英国の大規模研究型大学20校で構成されるグループで、政府などへの大学側の要望を伝える団体として1994年に設立

17 主にビジネス領域を専門とする23の大学等で構成される団体 "University Allianceグループ" に所属するUniversity of Salfordの副学長のインタビュー（出典：Times Higher Education）

18 Next stage of the HE consultation opens (4th Aug)

2分でわかる英国高等教育改革のいま【3/3】

について、財政の安定性や説明責任などに関するリスクの程度に応じて大学等毎に異なる実施頻度を設定

③ 学位授与権の取得要件について、教育提供機関と非教育提供機関とで異なる条件を設け、その更新期限にもリスクの程度に応じて大学等毎に異なる期限を設定

④「大学」としての資格取得に要する在籍（フルタイム）学生数の最低基準を緩和し、現行の4,000人（うち3,000人が学位取得を目的に就学）から1,000人（うち750人が学位取得を目的に就学）に変更

この意見募集に対し、HEFCEは10月28日に回答を公表し、論点毎に意見を述べている[19]。まず、①に関しては、法改正にあたって、例えば次の点を明らかにすべきであると主張した。

・HEFCEの権限と義務
・異なるステークホルダーを規制する際の優先順位付け
・2013年8月からの大まかな活動フレームワーク
・HEFCEの規制対象を全ての大学等とし、かつそれらの機関との独立性を維持
・新たな課題に迅速かつ効率的に対処するための柔軟性の確保
・重大事項に関して、HEFCEが他の規制機関と効果的な協力体制を構築して調査を行う権限の取得
・BISへの提言を行う権限の保持

また、②については、積極的な支持を表明。③に関しては、教育提供機関と非教育提供機関とは、基本的には同要件にすべきであると主張。そして、④については、在籍学生数は、大学等を構成する要素の一つに過ぎず、これらを基準として法制化すれば大学等の多様性が阻害されるとして、反対の意を示した。

この他、上述の、11月10日に発表された下院BIS特別委員会の報告書においては、特に③及び④に関連して、規制緩和が高等教育の水準低下を招いてはならないという観点から、QAA[20] による監査を受けて、適切な記録を残してきた機関に学位授与権を承認するという一義的義務をHEFCEに与えるべきであるといった見解が示された。

本テーマに関する意見募集は10月27日に締め切られており、1月末までにはその結果が発表される見込みとなっている。そして、技術的な側面について関係機関とも協議を行いつつ、関連する法令の整備を進めていくことが予定されている。

3. 入学出願制度改革

（1）背景

これまでの入学選考は、出願時において、受験生の在籍校が示すAレベルなどの試験結果の予想に基づいて実施されている。しかし、高等教育白書では、UCASによって検討が行われている、試験結果発表後に出願を行う新たなシステム"Post-Qualification Applications（PQA）"の導入を含めた見直しの結果を待って、入学出願制度に関して更なる検討を行うことが提示された。

この背景には、貧しい境遇の学生や、入学試験で事前に示された成績期待値よりも優れた結果を出した学生に対して、より平等な進学の機会を提供し、アクセスの拡大を図るという政府の考えがある。

（2）進捗状況

10月31日、UCASは、入学出願制度に関する自らの検討結果を発表し、教育機関のリーダーや出願代表者、学位授与機関、関連省庁などのステークホルダーからの意見募集を開始した[21]。UCASによる見直し案は、高等教育セクターの協力を得た詳細な調査研究を基に検討されたもので、過去50年間で最も包括的なものと言われている。本案においては、PQA制度をさらに発展させた新制度を2016学事年度以降に導入すること、また、その準備として、段階的な変更を2014学事年度から実施することが提案されている。新制度は、これまでのクリアリング制度[22] を廃止し、以下の3つの異なる出願受付期間を設けるもので、導入に伴い、Aレベルの実施が現行より15日前倒しされ、7月上旬には試験結果が発表されることとなる。

・第一期（常時）：出願受付開始時に既に試験結果を得ている出願者向け。
・第二期（6月末から7月第3週まで）：入学を予定する年に試験を受ける出願者向けで、大部分がこれに該当。選考結果は9月第3週までに大学等が通知。
・第三期（7月末から10月初旬まで）：第二期で不合格となった者及び第二期の締切以降の出願者向け。

この意見募集に対し、UUK[23] は10月31日に回答を行い、UCASによる新制度により入試選考の効率性が向上し、出願者の利便性も向上するだろうとの支持を表明した[24]。また、Russell Groupも同日、見解を発表し、現在の入学出願制度の見直し自体には非常に積極的な姿勢を示したものの、UCASの新制度が、出願者に対する公平性を向上させるとともに、より徹底した入学審査を実現できるかどうかは定かではないと主張した[25]。

本意見募集は、1月20日に締め切られ、その結果を踏まえたUCASの提案が、3月中に報告書として発表される予定となっている。（高橋、奥村）

---

19 HEFCE responds to BIS consultation on a regulatory framework for higher education (28th Oct)

20 Quality Assurance Agency for Higher Education：高等教育質保証機構　英国における高等教育資格の適正な水準の保護及び高等教育の質の管理に対する継続的な改善を目的として、大学等を対象とした機関別監査や評価、高等教育資格に関する情報提供などを実施

21 Admissions Process Review consultation published by UCAS (31st Oct)

22 大学等の入学審査結果が発表される8月以降に、合格通知を持たない受験生が定員の埋まっていないコースへ出願できる制度で、9月までの間に利用可能

23 Universities UK：英国大学連合　英国内の全大学の声を代表する組織として1918年に設立

24 Universities UK response to UCAS admissions process review consultation (31st Oct)

25 Admissions Process Review (31st Oct)

スタッフ写真館
今月の一枚

"I wish you a Merry Christmas!" by Ryo Takahashi

素敵なプレゼントが降り注ぐ、クリスマスイヴのロンドンハイストリート。
バスも人も、師走の風を纏って家路を急ぐ。

このページでは、JSPSにて実施する国際交流事業やイベントなどを抜粋して紹介します。なお、詳細は各事業ウェブサイトをご覧ください。

◆JSPSが募集する国際交流事業

外国人特別研究員（欧米短期）

欧米諸国の博士号取得前後の若手研究者に対して、我が国の大学等において日本側受入研究者の指導と共同で研究に従事する機会を提供します。

＜JSPS東京本部受付分＞

申請受付期間：2012年4月2日（月）～6日（金）

※申請は年6回受け付けており、次回は5月上旬の予定。

※申請者の所属機関によって機関内での締切日が異なりますのでご注意下さい。

来日時期：2012年8月～2013年3月の間に来日し、滞在期間は1カ月以上12カ月以内

支給額：
①往復航空券
②滞在費 362,000円/月（事業開始時に博士の学位を有する者）、200,000円/月（事業開始時に博士の学位を有しない者）
③その他（海外旅行傷害保険、渡日一時金等）

申請方法：日本側受入研究者がJSPS東京本部に申請

採用予定件数：年間計60名程度

※募集要項等はこちら

＜JSPS London 受付分＞

2012年12月1日に、平成24年度（第1回）外国人特別研究員（欧米短期）の申請を締め切りました。今回は2012年5月～2013年3月までの来日分にかかる申請であり、合計24件（自然科学17件、人文・社会科学7件）もの申請がありました。分野別では化学及び地学が比較的多く、歴史学、生物学、物理学、工学、数学からも応募がありました。応募者の所属機関はさまざまですが、University of Bristol など、今年度事業説明会を実施した大学からの応募もありました。現在は英国ピアレビュワーによる書面審査を行っており、2月下旬の合議審査により採用候補者が決定する予定です。

※日英交流事業の最新の公募情報はこちら

JSPS東京本部オープンアクセス調査団訪問（2011年12月7日）

◆JSPS Londonイベント情報

＜在英日本人研究者会議＞

2012年2月24日（金）に、英国の大学その他の公的研究機関にて研究に従事している日本人研究者のネットワーク作りを目的とした、第7回在英日本人研究者会議を開催します。詳細は以下のとおりです。

場所：JSPS London　レクチャーホール
日時：2012年2月24日（金）
16:00～20:30
対象：JSPS London 在英日本人研究者登録システムに登録されている、英国の大学・研究機関に所属する研究者（ポスドク・大学院生含む）、及び在英日系企業研究所の研究者

※プログラム等の詳細はこちら

※「在英日本人研究者　登録システム」

JSPS London が開催するイベントの案内やニュースレターなどを、在英日本人研究者でご希望の方に送信しています。情報提供を希望される方は、上記URLよりご登録ください。もしお知り合いで興味のある方がいらっしゃいましたら、本情報を転送いただけましたら幸いです。なお、対象となるのは、英国の大学・研究機関に所属する研究者（ポスドク・大学院生含む）、及び在英日系企業研究所の研究者です。登録ページはこちら

＜シンポジウム＞

2012年2月9日（木）に、日英シンポジウム開催スキームで採択された日英共同シンポジウム''Interdisciplinary approaches for the study of Senescence''（英国側コーディネーターはCancer Research UK 成田匡志氏）が、Cancer Research UK Cambridge Research Institute にて開催されます。当日は、愛媛大学、東京大学などの、日本の細胞老化研究分野の研究者5名が講演する予定です。

※シンポジウムの詳細はこちら

◆JSPS 各種情報を定期的にお届けします！

●JSPS Monthly（学振便り）
詳しくはこちら

JSPS の公募案内や活動報告などを、毎月第1月曜日にお届けするサービスです（購読無料）。情報提供を希望される方は、上記URLよりご登録ください。

（奥村）

編集を終えて

2011年度のニュースレターも早3号目。本誌では、当センターの活動内容を紹介すると同時に、JSPS London が関わる「人」を取り上げることを意識した誌面構成としてきました。2011年10月には今年一番の大物ゲスト、京都大学松本紘総長への平松センター長によるインタビューが実現しました（p3）。来訪時、特に印象的だったのは、相手によって何種類もの名刺を使い分けていらっしゃったこと。「女性の方にはこれを」と渡された名刺にはなんと、表面に0歳から現在までのご自身の写真が、裏面には小学1～2年の時の絵日記が散りばめてありました。松本総長のユーモアあふれる、親しみやすいお人柄がこのようなところにも表れています。

なお、私が編集を担当するニュースレターは今号で最後となります。短い期間でしたがどうもありがとうございました。今後ともJSPS London ニュースレターをよろしくお願いいたします。（加賀）

監　　修：　平松　幸三
編 集 長：　齋藤　智
編集担当：　加賀　涼子

JSPS London

日本学術振興会　ロンドン研究連絡センター（JSPS London）
14 Stephenson Way, London, NW1 2HD United Kingdom
TEL: +44-(0)20-7255-4660 / FAX: +44-(0)20-7255-4669
email: enquire@jsps.org
Website: http://www.jsps.org